

その1

「雷鳥、お前の車両の置き換え用として新型車両を導入することにいった」

雷鳥が上司からそう告げられたのは、三月も終わろうというのに雪がちらつく日の事だった。

「新型車両、ですか」

大きな執務机の前に立った雷鳥がそう言うと、ああ、と椅子に座っている上司から肯定の言葉が返ってきた。

「ようやくだ。ようやく車両の置き換えが出来る」

繰り返す上司の声はどこか弾んで聞こえた。雷鳥の鼓動も新車という響きの甘美さに震え、俄に早くなる。

雷鳥や同僚のしらすぎをはじめとして、北陸を走る昼間特急は皆、国鉄が設計、製造をした485系もしくは489系電車を使っている。だが、雷鳥が金沢に来てから二十五年以上が経ち、度々塗装や客室内の改良が加えられてきたとはいえ、毎日のように海沿いや山間など長距離を走る特急車両は、内外ともに老朽化が進んでいた。

だから、上司から新型車両の事を切り出された際、ここに来てようやくと、という気持ちが少なからず雷鳥の中にあつた。

北陸地区と関西地区は昔から結びつきが強く、人の動きが活発だ。それ故に雷鳥は運転本数が他の特急と比較しても特に多く設定されている。またそれだけ多くの列車を走らせても、乗客率も常に高水準を保っている。まさに、本社から見ても雷鳥の路線は「ドル箱」路線だ。

だからこそ、いつ新型車が導入されてもおかしくないと思っていた。二十年を過ぎた頃から、ずつとだ。国鉄から各旅客鉄道会社へと民営化したことを機に、各社がこぞつて新型の車両の開発に乗り出しているという話を耳にする度に、歯がゆい気持ちになっていた。

だが、そう感じることもなくなる。

「その新型車両はいつこちらに来るのですか？」

逸る気持ちを抑えながら、そう尋ねると、上司は机の上に積み上げられた書類から一束の紙を引き抜いた。そして、どこかに書いてあつたなとその束を一枚一枚捲っていく。

十枚近く捲つた所で、ようやく該当箇所を見つけ出したのか、ここに書いてあつたと雷鳥に現在の状況を説明し始めた。

「車両の設計は終わり、現在車両工場です試作車の製造に入っているようだ。梅雨が終わるくらいには北陸本線でのテスト走行が始まる予定だ。半年ほどの時間を掛けてテストを行い、旅客列車にも投入した上で、結果を持つ

て量産に入る」

ゆくゆくは、百三十キロを超える速度での運転も視野に入れているから、テストは時間を掛けて念入りに行わなければならぬ。上司が何気なく読み上げたその言葉に、雷鳥は目を見張った。

三年ほど前から、スーパー雷鳥を名乗る列車が湖西線内だけで時速百三十キロでの運転を始めたが、それよりも更に早くなるというのか。ひかりやこだまのような新幹線ではなく、この在来線の線路の上で百三十キロを超える速度で走るなど、まるで夢物語だ。

「そんな事が可能なんでしょうか？」

「ん？ まあ、やってみなけりや分からないだろうってことだろうな。速度が出るに越したことはない」

「それはそうですが……ところで、新しい車両の列車名はそのまま『雷鳥』になる予定でしょうか？」

その問いは、新しくやってくる車両が自分のものになるかどうかを暗に尋ねたものだった。『雷鳥』という名で運転されるのであれば、それはすなわち雷鳥の車両になるということだ。だが、新しい名称が与えられるのなら、その車両は新しくやってくる特急のものになる。

上司は、ふう、とため息を吐いた。

「それが、既存の雷鳥との差別化を図るために変えてはどうかという意見も出ていてな。だが、お前がここに来

てから頑張ってくれたお陰で、特急『雷鳥』という名は沿線の人々にも馴染み深いものになっている。その名を簡単に変えてもよいものか、意見が分かれている」

新車が入るのは喜ばしいが、こういう事で揉めるのは嫌だねえと、ため息混じりに呟いた上司は、目の前に経つ雷鳥を見上げると、雷鳥はどうなつて欲しい？ と突然話を振ってきた。

「俺は……どちらでも」

本心を隠すため、僅かに口ごもつた雷鳥を見て、上司がニヤリと笑つたような気がした。見間違いだつたかもしれないと思うほど一瞬の事だったので確証は持てなかつたが。

「まあ、どのみち北陸と大阪の間に導入されることは決まっている。名称がどうなるか決まるまでは『雷鳥』と呼ぶしかないだろう。そうなると雷鳥が二人存在することになるから、紛らわしいかもしれないな。それとも、スーパー雷鳥とも呼ぶか？」

ふと、引つかかる言葉が耳に入った。二人？ 雷鳥が二人存在するとは、どういうことだ。

「あの、二人とはどういうことでしょうか？」

上司が言っている事を上手く理解することが出来ず、慌てる雷鳥に、気付いていなかったのか、と上司は驚きの表情でまじまじと雷鳥を見た。

さよなら、騒がしくも愛しい日々

「言っていないかったか？」

「聞いていません」

「そうだったか？ それならすまん。特急は車両の形式によつてそれぞれ担当が決まる。だから、同じ『雷鳥』であっても、新型車両を担当するのはお前ではないんだよ、雷鳥。新しく、新型車両の列車を担当する者が来る事になる」

「話には聞いた事があります。ですが、今までは気動車や客車から電車に変わった事による引き継ぎだったのではなかったのですか」

雷鳥は動揺した。新型車両が来るのは嬉しい。だが、自分が引退するのでは意味がない。雷鳥はこの先もずっと走り続けるつもりで、これからやつてくる新人に今の立場を譲るつもりなどさらさらなかったのだから。

そんな雷鳥の気持ちを知つて知らずか、上司は再度言つた。

「車両の形式が大きく変わる時に、その列車の担当者が変わるのとは昔からの慣例だ。JRになつたからといつて、その制度を改めるつもりはない。少なくとも、今はな」

その言葉に、雷鳥は何も言えなかつた。上の決定は絶対で、逆らうことなど出来はしない。それは、はくたかか廃止となつた時に身をもつて実感したことだつた。

「そう気を落とすな、雷鳥。何も今すぐお前に引退しろ

と言つているわけではない。先にも言つたが、名前が『雷鳥』となることすら決まつていないんだ。それに、お前が今運転している本数をまかなうだけの新型車両を作るには時間も金も掛かる。そう簡単にできることではないんだよ」

だから、まだまだお前には働いてもらつてもいい。そんな上司の言葉も、今は雷鳥の耳をすり抜けるばかりだつた。

「君が引退!? そんな馬鹿な」

しらすぎが手にしていたグラスをテーブルの上に置いた。がちゃん、と耳障りな音がして、雷鳥が慌てて辺りを見回す。

「おい、大きな音を出すなよ」

業務が終わつた後で、二人はそのまま駅近くの居酒屋で酒を飲んでた。他愛ない会話に織り交ぜるようにして、今日上から話があつた内容を雷鳥がしらすぎにかいつまんで説明したところ、いきなりしらすぎが怒り出したのだ。

グラスは割れてもひびが入ってもいいないようだった。ほっと胸をなで下ろし、雷鳥は自分の前に置かれていたお猪口を摘んで口元へと運ぶ。温められた日本酒がふわりと香った。

「代わりに新人が新しい『雷鳥』として金沢に来るらしい」

「もし、それが本当のことだととしても、上が君をそう簡単に引退させるわけがないよ。君は今、金沢にいるどの特急よりも多くの本数を走らせている。その手腕は簡単に習得できるようなものじゃないってことくらい、上は分かっているはずだよ」

普段穏やかなしらさぎが、珍しく口調を荒くしている。それとは対照的に、雷鳥は不思議と穏やかな気持ちだった。昼間に上司から話を聞いたときは、頭を殴られたような衝撃を覚えたが、数時間が経った今では、その衝撃も既に薄れている。

雷鳥が反論をしてこない事に気付いたしらさぎが、突然顔を覗き込んできた。

「雷鳥？ そんなにシヨックだったのかい？」

「いや、シヨックはシヨックだが…… お前が代わりに怒ってくれているから、俺は怒らなくてもいいんじゃないかという気がしてな」

「何を言ってるんだ。それとも本当は引退したかったん

じゃないのか？」

はくたかのように。そう、しらさぎが出した名前は、ちくりと雷鳥の胸を刺した。上越新幹線の開業と共に、上野と金沢を結んでいた特急「はくたか」が廃止になった時に、少しか引退したいと考えた事があったことを思い出したからだ。

はくたかとは、雷鳥やしらさぎが特急として北陸本線走り始めてから数年後にやって来た特急の一人だ。そして、雷鳥は密かに——実際の所、密かに、と思っていたのは雷鳥だけで、周りには知れ渡っていたようだが——はくたかに同僚以上の想いを寄せていた。

だが結局、先輩後輩という関係を壊すことを恐れた雷鳥は、自分の気持ちを伝えぬままだった。そして、上越新幹線が開業したと同時に、特急はくたかは廃止となり、引退という形で金沢を去って行った。

想いを寄せていた者の引退は、雷鳥にとっても相当なシヨックで、しばらくは酒を飲んで無理矢理寝るような日もあつた事を覚えている。

それでも、雷鳥は雷鳥であることを放棄しなかった。

いや、出来なかつたのだ。しらさぎと共に北陸本線初の電車特急として走ってきた時間を無に帰すことは、雷鳥自身のプライドを捨てる事と同じだ。そんな生半可な気持ちで、これまで走ってきたわけではないし、何より『雷

さよなら、騒がしくも愛しい日々

鳥』という特急の名前は、容易く捨てられるほど軽いものではない。

「……そう簡単に捨てられないさ、この名前は」

「まあ、君ならそう言うだろうと思っていたよ」

グラスを空にしたしらさぎは、傍に置いてあったボトルからワインを注ぎ足した。雷鳥も既に温くなった熱燗でお猪口を満たすと、それを一気に煽った。

「しかし、どうしたものかなあ」

「何が」

「これまで、数多くの特急がやってきては俺達の仲間になったが、皆それぞれに路線を持っていた。だが、次に来るやつは違う。誰かの代わりになる後輩ってのは初めてだろう？」

「確かにそうだね……」

「多少の訓練は受けてくるだろうが、色々教えてやらな」とな

雷鳥がそう言うのと、しらさぎは半ば呆れたような口調で、なんだ、と言った。

「何がだ？」

「いや、引退話が出てがっかりしているとはかり思っていたけど、そうじゃないみたいだなんて。むしろ楽しんでよ、雷鳥」

「そ、そんなことはないと思うが」

口ではそう否定するものの、しらさぎの言うとおおり、少し楽しみにしている面もあった。だが、口にはしていないし、態度にも出していないつもりだったのだが、相変わらずこの同僚は聡いことだと心の内のため息を吐く。

「いや、いいんだ。落ち込んでたら困ると思っただけど。あとは扱いやすい子が来てくれるといいね」

つまみに頼んだチーズの盛り合わせから、白いチーズをつまんで口に運びながら、しらさぎはざらりと言った。この同僚は、雷鳥が過度な慰めやアドバイスを喜ばない事を知っているのだ。だからこそ、こうして何十年も付き合っていられるのだろう。

「そうだな」

いつもありがとうな。感謝の気持ちを伝えたつもりだったが、逆に気持ち悪いなと言われてしまった雷鳥だった。